

ひんじま
歴史回廊

第10部・厳島の文化⑦

今は知られない厳島の名所のひとつに、木比屋谷の石風呂がある。四、五人が入れば満員になる広さの石造の室の中に湯を敷き、潮を注ぎ、松葉を燃やして蒸し風呂の状態にして、その中で過す。皮膚病や眼病、頭痛などに効果があったとされる、いわばサウナであった。

■名所化し建物並ぶ

「厳島道志記」(一七〇二年刊)に「近国他邦より来れる人、絶ゆる事なし」と記され、元禄の終わりにには広く知られていたらしい。観光案内の役割を果たした一枚刷りの絵図の類にも、寛政(一七八九年)以後に発行されたものには、大元社に隣接するあたり(その名が刻まれており、位置がほぼ特定できる。「厳島図会」(一八四二年刊

になやみ、石風呂を囲むように建物が立ち、多くの湯治客を集めていたと推測される。江戸中期以後の宮島の名所のひとつであった。

「道志記」刊行のころ作られたと推定される漢詩に、石風呂の熱きを法華経譬喩品の「火宅」にたとえた作品がある。教え信じれば、煩惱に満ちたこの世でも救いの方法が得られるように、蒸し風呂の熱さに耐えれば傍らの薬師仏が病を癒やしてくれると詠まれている。

弘法大師が作ったとの言い伝えもあるように、石風呂はもともと信仰と結びついて利用されていたものであろう。効能が重伝されるにつれ、珍しさも加わっていつしか信仰と切り離され、来島者が訪れる名所としてにぎわうようになったのかもしれない。

■桜めゆったりと
治療を目的とした利用者は島内に一定期間滞在して日に一、二度石風呂に入ることを繰り返して、ゆったりと時を過ごす。春の湯治客の目を楽しませたのは厳島八景の

一として名をばせた
「大元の桜」であった。
一 図会「石風呂図」
も、編者田中芳樹が、
花も終わりの弥生二十
日ごろに詠んだ一首が
添えられている。「風
絶えて浪は花なき夕暮
れの浦わにひとり散る
桜かな」
(県立広島大学教授・西
本察子)

にぎわう石風呂 遠方より客 体癒やす

土曜日に掲載します



「厳島図会」に描かれた石風呂(絵の上部)。煙が上がり、右側や下方に建物が並んでいる